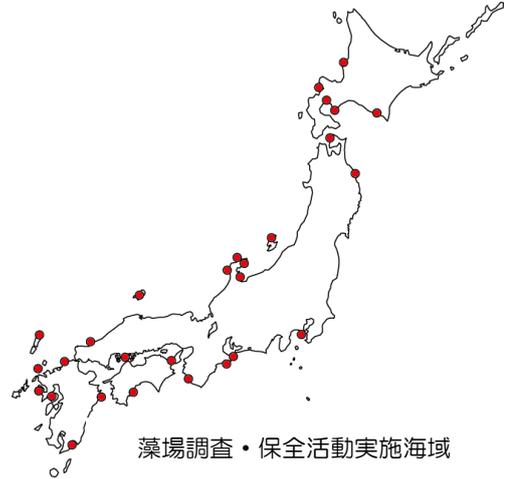


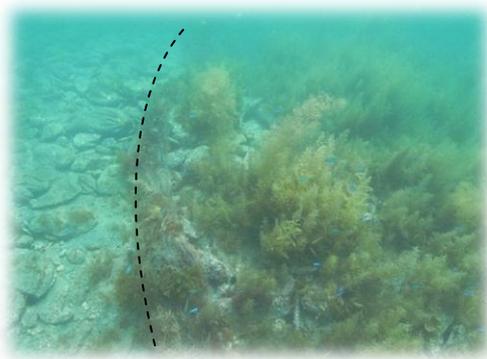
## 海の森づくり（藻場造成）

海の森である藻場（もば）は、魚介類の産卵・生育の場であり、海水を浄化する機能があります。ところが、近年国内各地でこの藻場が衰退し、何年も回復しない現象が起きています。これを「磯焼け（いそやけ）」と呼びます。磯焼けになると、海底は砂漠のような景観となり、漁業生産に大きく影響を及ぼします。水産庁では磯焼けの研究や対策事業を盛んに行っていますが、本格的な藻場の回復・維持増大には、まだまだ課題が山積しています。このため、様々な課題に対応した要素技術の開発と、これを適切に実施できる体制づくりが強く求められています。

当センターは、水産庁等の委託事業を受けて、防波堤などの人工構造物に藻場を造成する自然調和型漁港づくりの調査研究を平成7年度から開始し、最近では磯焼け対策のための要素技術の開発を行うとともに、環境生態系保全活動を実施する漁業者の方々のファシリテーター的な役割も担いながら、技術サポートを行っています。右図は、当センターが関わった藻場調査・保全活動の実施海域です。



藻場調査・保全活動実施海域



点線部分にウニフェンスを敷設しています

左の写真は長崎県長崎市の三重地区の藻場が再生した事例です。ここは、平成20年3月から磯焼け対策のサポートを始めました。内容は、ウニフェンスで範囲を決めた場所のウニを除去（密度管理）し、その海上に流れ藻キャッチャーを設置して海藻のタネを供給させる複合対策です。これを海藻の成熟時期に併せて2年間実施し1.1ヘクタールの藻場を再生させています。

また、最近の磯焼け対策の課題は、植食性魚類の除去方法と除去後の利用方法です。アイゴやイスズミは群れで行動するため一度に大量に漁獲されることがあるので、その際の処理方法を検討しておく必要があります。未利用魚のアイゴやイスズミの利用価値を高めるため、地元の加工や流通の専門家や企業、大学とも連携して利用方法を検討しています。今や単なる地先のハードの藻場造成工事ではなく、地元経済の成長につなげるためのソフト技術の検討を行い総合的なインフラ整備に資する技術開発を目指しています。

### ○藻場に関連する主な実績

藻場造成型漁港構造物調査設計ガイドライン（平成15年）

緊急磯焼けガイドライン（平成19年）

藻場消滅防止対策ガイドライン（平成21年）

藻場に関連する論文（平成7年～）土木学会 5件、水産工学会 25件、国際藻類学会 1件、その他 7件